悪魔はいいました。

鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪魔はいいました。

【Ｎコード】
Ｎ５８５８Ｈ

【作者名】
鬱

【あらすじ】
＊完結しました＊ある日少女の前に現れた悪魔。彼はいう。君の魂がほしい、と。

一言目（前書き）

本来は短編の予定だったのですが、書き留めていた続きを発見したので連載に変更しました。
評価してくれた方々並びに、お気に入りにしてくれた方々に謝辞を。

一言目

「お前の魂が欲しい。お前の魂が欲しい。魂と交換に願いを叶えよう」

悪魔はそういいました。どこか甘く、どこか優しく、恐ろしい声で。

轟々と音を立てて窓の近くをトラクターが過ぎた時だったでしょうか。よく知った声色の看護婦さんが私の部屋に彼を招き入れたのは、ほんの数分前のことのように思えます。

もう春の中頃だというのに、まだ空気はしんとしていて、毛布と掛け布団だけでは寒いように感じられました。

小さく咳払いをする私を気遣う看護婦にしびれを切らした私は、ついに耐えかねて訪ねました。彼はずっと沈黙を友としているのです。

「ねえ、看護婦さん。兄はどんな格好をしているの？」

看護婦さんはもったいぶった様に笑いました。その笑みというのは家族に会えたことが嬉しがってる少女に向けたものなのでしょうが、実際はいもしない兄をいぶかしんでいる私には些か……そう、不快でした。

「そうねぇ……背丈は高くて、黒いスーツと黒いソフト帽子、黒いネクタイに黒い靴。シャツだけはびっくりするくらい白いわ」

「まるでお葬式ね」

私の冗談に看護婦さんがはっと息を呑んだのが伝わりました。私はその様子を不快に感じるだとか、うろたえるというよりも、やっぱり私は余命幾ばくもないということを何とあなしに感じられて寧ろ、心が落ち着くのを感じました。

正直に私の寿命はどれくらいなのか、と聞いたところで曖昧な言葉が返ってきたり、ありもしない希望を持たされて最後に辛い思い

をするくらいなら、はっきりとお前は死ぬのだと突きつけられた方が心にゆとりができるというものです。
私は辛いというよりも寧ろ清々しいというのに彼女は酷く申し訳ない気持ちでいっぱいらしく、沈んだ声で無理をしないようにと決まり文句をいいました。
「じゃあ、私はこれで……」
「ねえ、今日もお山は綺麗？」
「……ええとっても」

取り残された彼はじっと何かを見つめているようで一言も喋りません。ここから見えるものといえばこの孤独な病室と私、それに窓から見える雄大な山でしょうか。
この病院から少し離れたところには、私が生まれるずっと前から大きな山があって、入院する前は、よく家族でその山へとピクニックに出かけたものでした。
山から見下ろすこの田舎町の景色は本当に美しく、広大で、ゴッホの絵のように力強い輝きを持っていました。夏の青い草木の香り、秋の燃えるような色づかい、冬の物々しい侘しさ、春の暖かな土の香り。どれもが懐かしいです。
三歳の頃に家族で山頂に蒔いたアジサイはどうなっているでしょうか。最後に見た赤紫色の花はあれからどうなったのでしょう。
窓から入る柔らかい風が頬を滑り、私の髪を揺らすのを感じます。先ほどから一言も喋らない見舞い客に私は少しじれったく思い、少し強い口調で訪ねてみました。
「私に兄はいないのだけれど、あなたは知っていましたか？」
「いいや」
「あら、そちらにいらしたの」
表情は冷静を保っていましたが内心酷く狼狽えました。彼はずっと私の足元、つまりはベットの端の方に立っているとばかり思っていたからです。

聞こえるはずの方角から低くも高くもない囁きが聞こえたものですから、本当は悲鳴のひとつでもついて出そうなものですが、強い口調で喋った手前、そんなみっともないことは私のプライドが許しません。

彼はいつの間にか私の傍に腰掛け、じっと私を見つめている。何か私は蛇に睨まれたように焦燥に駆られ、掌がじっとりと汗ばむのを感じました。

何か圧力を感じる視線から逃れたい私は空気を変えるためにも、彼の目的を知る為にも言葉を紡ぎます。

「あなたは一体何者ですか？」

「俺は……悪魔だ」

悪魔。どういう意味でしょうか。私には全く検討がつきません。

「……その悪魔さんが一体私に何のようですか？」

そうして悪魔はいいました。どこか苦く、どこか厳しく、優しい声で私に囁きました。

「お前の魂が欲しい。お前の魂が欲しい。魂と交換に願いを叶えよう」

そう告げられた瞬間、私の周りを包む空気は鋭く冷え切って、全身に鳥肌が穿ちました。窓の外からは鳥がここから逃げ出すように羽ばたく音が聞こえます。

目の見えない私にも本能的にそれが人ならざる何かであると感じられました。何故わかるのだと説明を求められたら、酷く困るでしょうが、恐らくは私が死の淵に片足を浸しているからでしょう。

「願い……」

私はその言葉を口の中で転がしながらじっと考えます。願い事――叶えたい思い。叶えたい夢。

きっと彼は本当に私の命と引き換えにありとあらゆる夢を叶えてくれるだろうという奇妙な確信がありました。本能的なものです。

彼は本当に悪魔で私の願いを叶える力がある。私は必死に怖気る肌に震えながら自分の夢を、欲望を、小さな脳で考えます。

そして考え抜いた末に出た答えは酷く単純なものでした。
「……私には何にも叶えたい願いなんてないわ。魂を掛けるくらいなら私は家族の幸せを祈っていた方が幸せよ」
全てを熟考した結果、私に魂を掛けるほどの願いは無いのだと思いました。欲が無いというわけではないのでしょうが、それを叶えるのは別に今ではくてもいいし、望めばすぐにでも叶えられる夢でした。
単純にいえば百円と十円が二枚あれば自販機で好きな飲み物を買えるし、テレビのコマーシャルでやっている美味しそうなチキンだって、お見舞いにくる家族に前もって言っておけばいいのです。私の好きな山だって看護婦さんに頼めばその様子を教えてもらえる。
隣の悪魔はそこにいるのかどうかわからない、曖昧な状態で何も言わず私を見つめ続けました。私にはそれが急かされているように感じられて、何度も見えていない目で彼の顔色を窺おうと探りました。
彼は私を罵るように冷たく、低い声で笑いました。
「お前に願いがないだと？　そんなちっぽけでボロボロのお前が、重症のお前がか？」
何であなたにそんなことまで言われなければならいのだと、私も少し悔しくなって言い返しました。
「それでも家族がいるだけで十分幸せよ。今度あそこの山に生えているアジサイを持ってきてくれるの。この幸福さは家族のいないあなたには分からないわ」
悪魔はにやりと頬を歪めました。目の見えない私にも何となく彼がそうしたのが分かりました。
「お前だってわかっているだろう、今日で工事は終わりだ。だから俺はここにいる」
その濡れた刃のような言葉に私はぞっとしました。だけれど私にはどこかの工事が終わろうが全く関係の無いことでした。
反論のできないでいる私を畳み掛けるように悪魔はいいます。

「それではお前に足をやろう。野山を駆けることのできる丈夫な足を」
私は答えます。
「足があったって手がなければ起き上がれないわ」
悪魔はいいました。私は答えます。
「ならば手をやろう。何でも掴める器用な手を」
「手があったって目がなければ何も掴めないわ」
悪魔はいいました。私は答えます。
「ならば目をやろう。全てを色鮮やかに見通す目を」
「足がなければ外を見通すこともできないわ」
悪魔はくたびれたように笑いました。私もどこかこの押し門等を楽しんでいるような気持ちになって少し頬が歪みます。
「じゃあ何が欲しい。お前は何が欲しいんだ」
「私に欲しいものなんてないわ。家族が幸せであればそれでいいの」
本心からでした。父と母と弟が幸せなら私はそれでいいのです。
悪魔はまるで普通のことのような口調で言いました。
「もうすぐお前は死ぬのにか？」
「……ええ、死ぬわ」
分かってはいるのですけど、いざそれを宣告されると体を何か気味の悪い物が突き抜けていくような気になって酷く落ち着きません。看護婦さんの時とは違う確かな何かに震えが、鼓動が高鳴るのが、止まりません。
私はその言葉を誤魔化すように深く、とても深く深呼吸をしました。それをみた悪魔は優しく囁きます。
どこか選ぶように。どこか気遣うようにして悪魔はいいました。
「ならば夢をみたらどうだ？　健やかで甘美な夢を」
私はクスクスと笑いました。彼は何故私が笑っているのか理解できず、どうしたと疑問を投げかけます。
悪魔の癖に人を気遣うという事実に私は笑いを隠せませんでした。
この優しい悪魔なら構わないかもしれない。

「……私のね、私のお父さんの会社は火の車なの」
お父さんの丸まったお腹と分厚い眼鏡が脳裏をかすめます。
優しくて綺麗なお母さんに野菜もちゃんと食べなさいと怒られていたのを思い出しました。
「ほう、それで？」
「私が死ぬと両親にお金が入るの」
二人はとってもお似合いで、笑うととても綺麗で、私も将来はあんなお母さんになりたいと思っていました。
「……それで？」
「弟は食べ盛りなの」
好き嫌いのない弟。私よりもずっと力が強いのに私に喧嘩で勝てない心の優しい弟。
「……それで？」
「それだけ」
「……」
悪魔は黙り、私は笑います。
ゆっくりと彼は嘆きかけました。
「お前の魂が欲しい。お前の魂が欲しい。魂と交換に願いを叶えよう」
悪魔はそういいました。でも私はこう答えます。
「私に願いなんてはないわ。家族の幸せを祈るだけよ」
そう言い切ると彼は小さくため息をついて立ち上がりました。革靴のカツリという心地よい音が部屋に響きました。
私は見えない目で悪魔の方向に顔を向けます。そうすれば見えない彼の姿が見えるような気がしたから。
エメラルドのような深い緑の瞳、彫りの深い綺麗な顔、喪服のような黒い服。それらがそうすれば見えるような気がしたのです。何も映らなくなった私の瞳に映るような気がしたのです。
「……必死で決死のその意思に手を引こう。それでは楽しい会話のお礼だ。今日は雨を降らそう。お前の為にとびっきりの雨を」

「きっときっとそれは美しいのでしょうね。銀色で、両手いっぱいの雨が野原に降り注ぐのでしょうね」
キラキラと光に輝き、草木に弾かれ、土に消えていく。そんな儚く、脆い美しい雨。
もしも私に目があれば、山にかかる銀色のカーテンを見れたのでしょう。もしも私に目と足があれば体一杯に雨を浴びれたのでしょう。もしも私に目と足と手があれば沢山の雫を両手で掴み、踊ることができたのでしょう。
だけど私には、それはもうずっと前からない。
「そうさ、生物は歌い。植物は謡い。心は謳う。そんな雨をお前の為に降らそう」
私は痛む唇を無理やりに持ち上げて悪魔に答えました。
「ありがとう……そしてさようなら」
「ああ、さようなら」
カツリと革靴の心地よい音が聞こえました。私は言葉を零すようにして紡ぎます。
「山は……山は今日も綺麗かしら？」
「……ああ、とても美しいよ。お前の手のように。お前の瞳のように。お前の足のように」
その例えがとても変わっていたからでしょうか私はまたクスクスと笑ってしまいました。
「明日も来てくれるの？」
「……ああ、お前の魂を貰いに訪れよう。きっときっと」
「うそつき」
私は笑い、悪魔は何も言わずにコツコツと音を立てて去りました。
私は外を見つめ、外の静寂を。外の喧騒をまだかまだかと待ちました。
悪魔は去りました。

二言目

「飯をくれ。お前が本当に慈悲深き神の信徒であるなら俺に飯をくれ」

男は戸の向こう側で静かにそう言いました。木製の戸の向こうから透き通るような声が響きます。

こんな時間に誰だろうといぶかしみました。祈りを止めて礼拝堂の扉に近づきます。

一応年頃の彼女はどこもはしたなくないようにと、長い髪を撫で付けます。喉を整え、よく通る声で扉に向かって声を出しました。

「いいでしょう。迷える子羊よ。神はどんなものにも慈悲をお与えになります」

重い扉はゆっくりと開かれ、黒いスーツに黒いソフト帽子を被った男が姿を現しました。

シスターは身なりのいいこの男が飯を求めていることに疑問を抱きました。

物取りでしょうか。それとも、暴漢かしら。それとも物の怪の類かしら。

「さあ、どうぞ。お入りなさい」

「いや、俺はここでいい」

シスターは微笑みました。

きっと彼は人ではない。ちらりと見えた帽子の向こう側がそれを彼女に教えていました。

グリーンの瞳の人間など見たことも聞いたこともない。

「神の家に入ることができない……貴方は悪魔ですか？」

悪魔はばつが悪そうに眉をひそめます。諸手を上げて卑屈にそれを否定しました。

「俺はただの人間さ。悪魔なんてとんでもない。それにそう、悪魔が人間に施しを受けると思うか？」

「確かにそれは奇妙ですね。では主の御名において貴方の名前をいいなさい」
ぐっと息を呑んだ悪魔は、辺りに視線を這わせて観念したといった風に溜息をつきました。
「わかった、わかった。降参だ。俺は悪魔だ」
「よろしい。正直者には暖かいシチューを」
シスターはにっこりと笑い悪魔にシチューを差し出しました。

礼拝堂の前、階段の踊り場で二人は腰を据えて夜空を眺めていました。辺りは薄暗く、明かりといえばちらほらと光る街灯と空に浮かび上がる小さな星々。
悪魔でも腹を空かせるのかとシスターは笑みを浮かべました。
「ねえ、貴方は何でこんな田舎に？　何か目的があるの？」
「目的なんてものはない。ただ人の欲を満たし、代わりに魂を頂いてる」
悪魔はシスターを見ることなく、パンを口に放り投げました。
「いいわね。私もいつかそんな当ての無い旅をしてみたいわ」
「何を悩んでいる。悩みなら俺が聞いてやろう」
シスターは目を見開き、次に笑いました。悪魔は自分が馬鹿にされているのかと眉をひそめます。
「ふふふ、ごめんなさい。でもね。でも、シスターが悪魔に懺悔するなんて不思議な話じゃない？」
「……ふむ、そいつはそうだな」
悪魔はスプーンを咥えながらにやりと頬を歪めます。シスターは冗談めかして目を瞑り、神に縋る様に両手を組みました。
彼女がシスターだからでしょうか、それはなかなか様になっていました。
「懺悔を聞いて下さい」
「ああ、聞いている」
「悪魔が名前を教えてくれません」

「他には？」
「パンが五つしか喉を通りません」
「他には？」
「そう……ですね。この教会は……いいえ、それだけじゃないわ。この孤児院は今にも取り壊されそうなのです」
急な彼女の真剣な口調に悪魔は、身を引き締めました。
「……ほう、それで？」
「本部に連絡を取り、司祭様に資金の援助を頼みました」
「……それで？」
「司祭様は特別扱いはできないと申されたのです」
「……それで？」
「そうされたくば、お前が持っているものを差し出せ、と」
「お前は……シスター。美しいお前はその意味を分かっているのか？」
「ええ」
美しく賢いこの娘はその司祭の言葉に意味を理解しているというのです。
悪魔は魂を取って終わり。
しかし人間はその身すら食い潰す。
「神に縋らず、神の権威に縋る生臭坊主の生贄になるというのか！」
悪魔はその悪魔のような司祭に怒りを覚え、吼えました。まるで地響きのような低いうねり声にシスターは少し驚きました。
シスターは目を開けて微笑みます。彼が自分の為に怒ってくれてくれているのが嬉しくて自然と笑みが零れました。
それは満月のように、夜空の瞬きのように美しく、輝いていました。
「それが信仰です」
悪魔は食器を床に置き、シスターの瞳を正面から見つめます。エ

メラルドのようなグリーンの瞳が鈍い光を放っているように彼女には見えました。
「飯のお礼だ。お前が望むなら自由にしてやろう」
「あら、そんなことができるの？」
「自由をやろう。美しい世界への自由を。向こうの山の越えた紺碧に空を映し出す海を。向こうの山の越えた赤々と炎のきらめきにも似た、燃えるような紅葉を。向こうの山の越えた月光と星々の輝く銀世界を」
「素敵ね。でも私にはとっても贅沢で身に合わないわ。悪魔さん」
シスターはそういって微笑みながら首を振りました。強く強く、首を振りました。
何故だと問う、悪魔に彼女は答えます。
「私がいなくなれば子供たちが悲しむわ。それに私がいなくなれば変わりの誰かが連れて行かれるの」
答えが見えているからでしょうか、悪魔は苦しそうにいいます。
「……ならばお前の魂を差し出せ。金だろうと自由だろうと司祭だろうとお前の望むままに変えてやろう」
「貴方は見かけによらず大悪魔なのね。でもいいわ、神の子たる人が悪魔と契約は結んではいけないから」
悪魔は帽子を目深に被って立ち上がりました。そして重々しく彼女に言います。
「いいのか、苦行だぞ。苦痛だぞ。きっとそれは苦界だぞ」
シスターも立ち上がって微笑みます。
「いいえ、これは試練よ。神が私たちに与えたもうた試練」
彼は帽子を押さえながらシスターに強く硬く言います。
それはさながら説得するかのように。彼女を案ずるかのように。
「救わない神を信じ。存在しない神を信じ。奇跡を起こさない神を信じ。お前は手を差し伸べる悪魔を笑うのか」
「そんなことはないわ。神は奇跡を、手を差し伸べて下さったわ。私はそれがあればこの先、どんな苦難が待ち受けていようと耐えて

いける」
悪魔は静かに一歩、階段を降りました。コツリと心地の良い靴音がします。
「神がだと？　一体どんな奇跡を差し伸べた？　神はいつだって心優しい美しいものを刈り取っていくだけだ」
「……私にやさしい悪魔との出会いを結んでくださったじゃない。私に神がいるという証明の悪魔（あなた）をここに運んで下さったじゃない」
悪魔は少し沈黙し、静かに言いました。まるでそれは詩を詠うようにどこか美しさを伴っています。
「……お前の為に雨を降らそう。自由の雨を。潮風を運び、紅葉を映し出し、雪解けの雫の雨を降らそう」
彼女はその言葉に酷く悲しそうな顔をしました。でもどこか嬉しさも混じったような複雑な表情。
それは悪魔をいとおしむような、彼に感謝するようなそんな表情。
「私知ってるわ。悪魔は泣かない」
「そうだ」
「だから悪魔は悲しい時に雨を降らすのでしょう？」
「……」
シスターは微笑みます。そして彼のために逆の十字を切りました。
「貴方に神のご加護がありますように」
「さようなら」
「ええ、さようなら」
シスターは手のひらを空にかざして雨を待ちます。空を眺め、零れ落ちる雫を待ちます。微笑み、じっと耐えます。
自身の涙が零れないように。自身の涙を誤魔化すように。
今か今かと天から降りそそぐ、冷たくて暖かい涙を待ちました。
悪魔は去りました。

三言目

「お前の魂が――――」
「欲しいっていうんだろう？　ねぇ？」
そう祖母は微笑み彼を見つめました。

わたしの毎日の日課は祖母の雑貨店の手伝いをすることでした。
学校の終わりの鐘が鳴るのと同時にわたしは祖母のやっているアンティーク店へと向かいます。
商店街を抜けた先の、少し古い匂いのする住宅街の奥にそれはあります。
わたしはウィンドウをから店内を眺めて祖母がいるか探すのですが、店内は薄暗い上にガラスが古く、中がよくわかりません。
電気を灯してくれれば分かりやすいのだけど、祖母のような古い人は電気を点けること好みません。電気の光よりも太陽の明かりを好むのです。
ガラスのはめ込まれた木製の戸を引き、私は中を伺いました。扉の内側に打ち付けられたベルがちりんと鳴ります。
「おばあちゃん、いる？」
「ああ、ここに座っておるよ」
祖母は店内の奥でアンティークのイスに腰をかけ、私に微笑みました。
「おやまあ、珍しいお客さんだ」
「おばあちゃん、孫の私の顔を忘れたの？」
「いいや、そうじゃないさ。後ろのそいつに私はいってるんだよ」
何を言っているんだろうと私は首を傾げます。しかし、祖母は私の背後に目を向けて微笑んでいました。
振り向くとそこには全身黒づくめの男が立っていました。
「わあ！　……ごめんなさい、あのわたし気がつかなくて」

祖母は魔女のような鉤鼻を擦り、笑いました。それは祖母が心から面白いと思った時の癖だと私は知っていました。
「ふふふ、そいつは客であって客じゃないよ。気にしなくていい」

男は帽子を取りわたしに目を向けました。わたしはその男の瞳がガラス細工のようにグリーンなことに驚きました。
外国の人でしょうか？
「この小さいのは何だ？」
「何ってそりゃあ、私の孫に決まってるだろうよ。それよりもアンタは挨拶もなしかい？」
「そうだな……久しぶりだ」
「久しぶりだぁ？　ははっそりゃあ確かに随分と久しぶりだねぇ」
祖母は鼻を擦り笑います。男は店に飾られたカップを手に取り眺めました。
「何一つ変わってない。お前も俺もこの店も」
「アンタの目は節穴かい？　私はご覧の通り、もうしわくちゃのお婆さん。アイツはこの前おっちんじまったよ」
祖母はそういうと店内に飾られた白黒の写真に目を走らせました。祖母と祖父が若い時に撮った写真だというのを私は思い出しました。
男は静かにカップをテーブルに戻すと静かにいいました。
「そうか、アレから随分と時間が立ったんだな」
「そういや、アンタは遂に私の結婚式に来てくれなかったね。まあ、でもじいさんの葬式の時、雨が降ってたから近くにはいたんだろ？」
「……」
男は何もいいませんでした。祖母は微笑みながら陶器のカップに熱いお茶を注ぎました。
わたしは湯気が上がるのを眺めて、一体いつのまにお湯を入れたのだろうと不思議に思いました。いつだって祖母は不思議なのです。
手の平に火を浮かべたり、紙で作った生き物を動かしたりと祖母は本当に不思議なのです。

祖母は鼻の前で紅茶のカップを回し、香りを楽しみます。
「……まあ、アンタが来たってことはそう遠くないと思ってもいいのかねぇ」
「その為に俺は来た。命のともし火が消える前に」
「私の願いを叶えようってことかい？」
彼は何も語りません。
「私の答えは分かってるだろ？　泣き虫さん」
『そんなもので叶った願いなんて、偽者。自分で叶えなきゃ意味ないわ』
悪魔は声色をまるで少女のように変えて言いました。お婆さんは目を細めて頬を緩ませます。
「そう……そうさ。しょせんはそれで叶えられた願いは夢なのさ」
「ならば夢を見ればいい。夏の生い茂る雄大な樹木を見ればいい。秋の燃え盛る雄大な紅葉を見ればいい。冬の敷き詰められた金色の絨毯を眺めればいい。春の小鳥のさえずりや川のせせらぎをまた聞けばいい」
「今じゃ川もなけりゃ小鳥もいやしないよ。馬車は消え、車が走り。火は電気の灯りに変わった。アンタはそんなことも忘れたのかい？」
「ならば作ればいい」
「作ったものなんて所詮は見せかけさ」
「……ああ、そうだ。そうだな。それこそが美しいお前なのかもしれない」
悪魔は帽子を目深に被りました。そしてお婆さんの後ろにいる私を見つめました。
私はどきりとして身をちぢ込ませます。
「お前はあの男と同じ目をしている。綺麗な魂だ。いつか、遠いいつの日か、お前の魂をもらいに訪れよう」
何か宣告にも似た言葉を前にわたしは返す言葉が見つかりませんでした。
「……おや、もう行くのかい？」

祖母は目を閉じて紅茶を口にしました。男は身を翻し、ノブに手をかけていました。
「ああ」
「せっかく入れたお茶は飲まないのかい？」
「俺がダージリンは嫌いだと知っているだろう」

「だからよ」
お婆さんは嬉しそうに楽しそうに微笑みました。その顔はまるで十代の少女のようです。
「さようなら」
こつりと悪魔の革靴の音が鳴りました。
「ああ、さようなら」
お婆さんはもう一度目を瞑り、紅茶の香りを楽しみます。
悪魔はこちらを振り向かず、ゆっくりと扉を開きました。
外の眩い光にわたしは目がくらみました。気がつけばどこにも男はいませんでした。
不思議とベルは鳴りませんでした。
「たまにベルが鳴らないけどなんでだろう」
「ベルってのは人がきた時、人が出た時しかならないものさ」
わたしには祖母の言っている言葉の意味が分かりませんでした。

「ふふ、しかし変わんないねぇ」
そうなの？
「……そうさ。それよりもここ一週間は雨が降るから傘をしっかり持つんだよ？」
お婆さん、何でそんなことがわかるの？
「なんでってそりゃぁ……あの人、泣き虫だから」

四言目

「久しい、久しいな。驚くほどにお前は変わらない」
彼女はベットから体を起こし、薄黄色の着物を正すと笑った。
「あなたも代わりないわね、もう五十年も経つというのに」
「もうそんなに経ったのか」
クスクスと彼女は微笑んだまま、急須にお湯を入れる。
「そんな訳ないじゃない。十年よ、十年」
「……」

白い一人部屋の病室。窓に白いカーテンが掛かり、優しい風が部屋に吹く。
悪魔はグリーンのパイプ椅子に座り、彼女の顔をじっとみると抑揚のない冷たい声で言葉を発した。
「人の医者はなんといった？」
「原因不明ですって。まあ、当然よね」
彼女はそういって目尻を緩ませて笑った。
笑い方一つとっても品があり、家柄がうかがえる。彼女は彼にお茶と側の棚から羊羹を出た。
悪魔は差し出されたそれには手をつけず、じっと動かず彼女を見つめたままだった。
「人の身に起る病ではないということか。イナリはなんといった」
「人と獣の回路がどうとかいっていたわ。私には正直、話し方が難しくて全然。天狐様といい空狐様といい、彼らって何であんなに仰々しい喋り方するのかしらね？」
彼女はお茶を息吹で冷まし、ゆっくりと飲んだ。悪魔はじっとその言葉を聞き入っている。
一息つくと彼女は窓から外を眺めた。
辺りは木々に覆われていて自然が多い。延々と続く田園地帯が端

に見える。
「結局、貴方の言ったとおりになった。本当に人は人ね。何かがそれになろうとしても、近づこうとも完璧にそれになることはできない。なったとしても何処かでガタが来る。ああ、でも子供はれっきとした人間よ？　そこは化かされた貴方に感謝しないと。混ざり物はあっちでもこっちでも得しないもの」
「然子、戻りたければいつでも戻してやる」
彼女は彼の言葉に目を見開いて驚く。
どこか意外そうに。どこか信じられないものを見るように。
「それは……タダで？」
「無論だ」
ゼンコと呼ばれた女性は破顔すると胸元からキセルを取り出し、指を鳴らして火を点けた。
禁煙だから内緒よ、と彼にいうと胸一杯に煙を吸う。
旨そうに煙を吐き、悪魔の顔をみる。
「貴方がタダで物事を引き受けるなんて珍しいわね。人間には命せびってるって聞いてるわよ？」
「お前は例外中の例外だからだ」
「それだけ？」
「これ以上を俺の口から言わせるのか？」
然子はグリーンの瞳を面白そうに見つめて紫煙を吐いた。ベッドの上に十字架の煙が浮き上がり、それは彼に近づく前に霧散した。
「……折角だけど優し過ぎる貴方の申し出、断らせていただくわね」
「それは、父の為か？」
「無論それもそうだけど、私は持前然子なの。死ぬなら然子として死にたいわ」
視線を顔全体から彼女の両目に合わせ、彼はいう。
「お前は俺を化かしたあの男の娘だ。人として死ぬには惜しい。もっと長く生きたいと思わないのか？」
その言葉に彼女は老獪な笑みを見せ、咽る。そして胸を叩きなが

らお茶を飲んだ。
キセルは既に手にない。
「貴方が私をここまで褒めるなんて珍しいわね。化かそうとでもしてるのかしら？」
悪魔は微動だにせず相変わらず冷たい目で彼女を見つめ続けた。
彼女はその目をみて少し悲しそうに喋った。
「……貴方を見てると長く生きることは幸福じゃないんだって分かる。それに私は父上ほど才能もないわ。そりゃ先々々代は凄かったらしいけど、今じゃこんなあたしの落ちぶれ善狐の血しか残ってない」
「では何故、山を残している」
「意地……かなぁ。折角旦那が残してくれるっていうんだし、私もあった方がやっぱり嬉しいのよ」
静かに彼は席を立つ。然子は彼を見上げ、首を傾げた。
カーテンが緩やかに踊り、部屋に風が吹く。
「あら、もう帰るの？　貴方って相変わらずせっかちね。真紅の魔女もきっとそういったんじゃない？」
「そこまであの男が恋しいか」
彼女は微笑み、目を瞑る。
「ええ、勿論」
「何が……そうさせる？」
彼女はその言葉に嬉しそうに語る。
まるで自分のことのように、自分の手柄のように微笑んで語る。
「あの人、猟師の癖に罠に掛かった生き物を助けちゃうのよ？　おかしいと思わない？　それも代々そういう家系なの。しかもでっかい山持ってるのに貧乏なの。それを売れば一生楽できるっていうのに、売らないであたし達よりも質素な生活してるのよ？　修行中の坊主もびっくりよ」
「奴自信に惚れたのか？　それとも助けられたから惚れたのか？」
然子は少し頬を赤らめて下を向く。目じりは“弧”を描き細くな

る。
「両方ね。だから最初はおとぎ話よろしくで行こうと思ったけど、誓いは厳しいし子供は混ざり物だし、いつかそれは雪解けみたく解けちゃうっていうじゃない。だから父上に相談したのよ、そうしたらこうなってたってところかしら」
悪魔は帽子を目深に被り、思い出す。どこからどうみても完璧な人間がいった一言を。
――私の魂と引き換えにこれを人間にして頂けませんか？
「俺の知人に人間の結婚など幸せでないという者がいる。然子、お前は幸せか？」
「幸せよ」
彼は振り返り、少し頬を歪めた。彼女もそれを見て笑う。
「ならば俺はお前に言わなくてはならない。お前の魂がほしい、お前の魂がほしい。変わりに願いを叶えよう」
「やっぱり貴方は優し過ぎるわ」
どこか憂いの瞳で彼女は悪魔を見つめる。
「何を夢見る？」
「決まってるじゃない。私が死んだら魔法が解けちゃう。だからそうならないように、持前然子のまま、いざなってちょうだい」
「ああ、分かった」
「あとコレを夫に渡してもらえるかしら？　渡せばあの人でも理解できるはずだから。もしかしたらあの人、気づいてるかもしれないけどね」
「いいだろう」
何かの毛で作ったキーホルダー。それを彼は受け取る。
彼女は横になると小さく息を吐く。急速に体が冷え始め、体から力が抜けていった。
彼女は目を瞑り、小さくか細い声で囁く。
その言葉は彼にしか聞こえない。
「ああ、これが人の死なのね。凄く緩やかで……暖か、い」

言葉が終わると同時に悪魔は指を鳴らす。すると彼女の口からガラスの破片ほどの小さな粒が出た。
七色に光り輝くそれを取ろうと悪魔は手を広げた。
「……」
途中でその手は止まり、彼女の差し出したお茶に向かう。
掴み、それは口に運ばれた。
ダージリン。
「女狐め」
光の欠片は気がつけば何処かに消え失せていた。
悪魔は帽子を被り直し、独り言をいう。
その言葉は彼以外の誰にも届かない。
「消えてしまったのならしょうがない。しょうがないな」
悪魔は去りました。

四言目（後書き）

もう気づいてる人もいるかもしれないけど、全部違う書き方（方法？）で書いてます。
で？とか言われたら「特に何もないよ」としかいえませんが。

五言目

「お前の……」
彼女は悪魔が語るよりも早くその言葉の続きをいいました。
“お前の魂が欲しい。お前の魂が欲しい。魂と交換に願いを叶えよう”……でしょう？」
彼は黙り、少女は笑いました。

遠くで海鳥の声がする。遠くで波の音がする。遠くで人の声がする。
ここは海の見えるサナトリウム。その近くの高台。
彼女は大きな木の下のベンチで海を眺めていました。髪はストレートで長く、いつものように青いパジャマの上に白いカーディガンを羽織っています。
「……どうしたのこんなところに？」
「昼食の時にいなかったから探しにきたの。まーた、先生が怒るよ？　“栄養管理も僕の仕事なんだー”ってさ」
わたしの言い方が面白かったのか早苗ちゃんは白い杖を持ったままクスクスと笑いました。わたしは彼女の隣に腰掛けながら早苗ちゃんの笑いにつられて吹き出しました。
互いにむせて、息を整えました。そして同じ景色を眺めます。
下のほうではグリーンの芝生と広葉樹の森が広がり、その先にはどこまでも続く青い空と海が見えました。
静かな空気の中、最初に喋ったのは早苗ちゃんからでした。
「……さっき、誰かとすれ違わなかった？」
「え、誰とも会わなかったよ？　お客さん？　珍しいね」
「お客さんっていうよりもお迎えかしら」
「家族かなにか？　それとも恋人とか！？」
わたしは彼女の言葉を無視するように茶化しました。何故ならこ

こでお迎えはネガティヴな意味でしか通じないから。
彼女は白い頬を緩ませて微笑みました。
この笑顔に施設の人達はやられるのかと私は内心羨ましく思いました。
病院のマル眼鏡先生なんて早苗ちゃんの大ファンでいつもデレデレしているのです。
「彼は……悪魔よ」
「悪魔……それって、うーん」
わたしは彼女なりのレトリックなのだろうかと思い、首を傾げました。
男性で悪魔って……そういうことなのかしら。
早苗ちゃんのファンのお爺ちゃんや先生が聞いたら泣いちゃうだろうなぁ。
そんなわたしに彼女は言葉を続けます。彼女は当たり前のようにそれをいいました。
「私、近々死ぬからその前に魂をくれれば願い事を叶えくれるんですって」
「……へえ」
私はその言葉に息を呑みました。
この施設では死ぬという言葉は冗談として通じないのです。
ここを出てく人は治療のためか、“治療する必要のなくなった人”しかいない。
そして一つの推理に辿り着きました。
恐らくはその悪魔は医者で、彼女の余命を宣告しにきたんじゃないだろうか、と。
“治療する必要のなくなった人”は好きなことをさせてもらえるというのは施設内で有名な話でした。
「私、彼が来ることはずっとずっと前から知っていたの。そのことを彼にいったら凄く驚いていたわ。でもやっぱり本当の彼はずっと大きくて優しかった」

「……それでどうしたの？」
彼女はこの施設の古株。彼女は珍しく饒舌にわたしに話しかけました。
いつも大人しい彼女が歳相応に笑い、楽しそうに語ります。
それがわたしを酷く心配させました。
「それから彼の手を触らせてもらったの。そうしたらね、いろんなものが見えてきた。螺旋のように続く悲しみが。終幕のような悲劇が。膨大な時間と膨大な孤独が。ほんの少し触っただけで、頭の中がパンクしそうになったわ。それで私は驚いて彼の手を離してしまったの。……不思議よね、そうなるってずっと前から知っているのにその選択をしてしまうんだから」
「……うん」
彼女は杖を握ったまま少し興奮したように話します。わたしは何だか彼女が遠くにいってしまうような気がして何も言えませんでした。
「私、見えてきたものが酷く悲しくて涙が出たの。彼の果てのない悲しみが怖くて恐ろしくて……そして辛くて。永遠に続く彼の業（ごう）に鳥肌が立ったわ」
そういって彼女はぶるっと震えました。わたしは側に寄り添うと、彼女の背中を擦りました。
もう我慢できませんでした。
普段、大人しい彼女の明るい表情が無理をしているようでわたしを酷く焦燥に駆らせるのです。
「きっと……きっと病気はよくなるって！　先生も回復に向かってるっていってたし、最近は出てないじゃない。ね、だからそんといわないでよ……！」
彼女の病気。
病名は知らないけど沢山の羽が出る病気。この長い歴史で十件しか報告されてないという病気。背中の骨が歪んで皮膚が鳥の羽毛のようになって剥がれ落ちる病気。

その痛みを彼女は全身を針で串刺しにされているような感覚だといったのをわたしは思い出しました。悲痛な叫びのあと、彼女が衰弱して涙を流していたのを思い出しました。

原因は不明で治療法もなくて、ただ痛みを和らげる為にモルヒネを打たれ続ける彼女。

それでも痛みは少ししか和らがなくて、先生は何度も何度も涙して壁に血が出るまで拳を打ち付けていたのを……思い出しました。

彼女の脳はぼろぼろで体もぼろぼろでわたしの心も今にも崩れ落ちそうでした。

「……いいの、私は私が一番よく分かってる。私を見つけたのも、羽が落ちていたからでしょう？　私には見えないけど見えるのよ？」

彼女はそういって微笑みます。わたしの頭を撫でて、声なく笑います。

わたしも声を殺して涙しました。

彼女に見つからないように。

彼女を不安にさせないように。

だけど体は震え、声が漏れます。

「彼はいったわ。それは昔、神様と結婚した私の先祖の血が甦ったものだって。私は神様の血が濃いんだって。そして、魂をくれるならその病気を何とかしてやれるって。でも断っちゃった」

「なんで……？」

彼女は優しくわたしを撫でます。柔らかく、小さな手がゆっくりと撫でます。

海を眺めながら、ただゆっくりと。

「彼ができるのはそこまでだから。私はずっと先を見てみたけど、その後必ず何か別のことで死ぬから。それは交通事故だったり、病気だったりね。既に私の死はさだめでそれが延命治療でしかないなら、私は早く死ぬことを選ぶわ」

そういって彼女は杖を待たず立ち上がりました。そしてゆっくりと探るようにして転落防止の小さな柵に近づきました。

柵に持たれながら彼女はこちらを向きました。
天使のような笑みが私を見つめます。
「私には世界中の声が聞こえるの。悲痛な叫びが、助けを求める声が……彼らの顛末が。きっとこれは人が持っていちゃいけないものなのね。だから私は死ななくちゃいけないんだわ。……悪魔にもそう私はいったわ」
「悪魔は……悪魔はそれを聞いてどうしたの？」
「静かにこういったの……時間よ止まれ、お前は美しいって。何それって聞いたら、昔彼と契約した人がいった言葉なんだって」
私は彼女の座っていた場所に沢山の羽が積もっているを見て、はっとしました。
彼女の歩いた地面には血の雫の跡がありました。彼女の額には汗が浮かび、目じりは痙攣しています。
「それで……悪魔は？」
「悪魔はそれで去ったわ。昔のように、いつものように、これからのように」
「早苗ちゃんは……どうするの？」
彼女の青いパジャマが破ける音。彼女は汗をボタボタと地面に落とし、足は震えていました。だけど……だけど何故か笑っています。
「飛べない……翼で空を、飛ぶの」
彼女は赤ん坊のようにふらつく足で柵を乗り越え、その白く輝く羽を見せました。
わたしはそれを止めることができませんでした。
止めたとしても彼女はきっと直ぐに死んでしまうから。
青ざめ、震えるその体は明らかにそういっていたのです。
なら、好きなことをさせてあげたい。
そう思うのは間違いじゃないはずです。
だから私はいいました。
泣きながら、顔をくしゃくしゃに歪めながら。
望んでもいないその別れの言葉を。

「……さようなら、早苗ちゃん」
「さような」
彼女は手を離し、下へと飛んでいきました。

「さようなら、永遠の旅人さん」
「きっといつかは終わる。お前の見切れていないどこか遠い未来で」
「そう……そうね。さようなら、まだ見ぬ先の旅人さん」
「願わくば審判の日に空で会おう」
「……ええ、また空で会いましょう」
「ああ、また」
悪魔は去りました。

五言目（後書き）

一応最後です。
方法のネタが尽きたので、これが最後になります。
みなさん、お疲れ様でした。
賛否両論あるかと思いますが、感想なんか頂ければ幸いです。
追伸：偶然、半角の総文字数が６６６６文字でした。最後らしいといえば最後らしいのかな？

ブログ。
ｈｔｔｐ：／／ｕｔｕ．ｅｄｏｂｌｏｇ．ｎｅｔ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5858h/

悪魔はいいました。

2011年4月24日19時26分発行